



クマグス 森羅万象

# その知は人類の共有財産に

何年前のことだが、英国と米国で南方熊楠について話す機会があった。

国際交流基金での講演会や、

ロンドン大学、ハーヴァード大

学での研究会。そうした機会に

一般の聴衆や専門の研究者に向

けて英語で熊楠のことを話す

と、きまってしまう質問を受け

て議論が白熱した。そして、日本

国内で熊楠について語る時とは

異なる「開放感」のようなものを

感じさせられることになった。

その主な理由は、南方熊楠自

身が十九歳から三十三歳までの

青年期を海外で過ごしたことに

あるだろう。アメリカでは進化

論を初めとする同時代の西洋の

科学・思想に関する本を読み込

んだ。フロリダからキューバに

かけて植物採集旅行を敢行し、

熱帯の生態を直に体感した。ロ



熊楠が海外の研究者らと交した書簡（複製）  
—和歌山県田辺市の南方熊楠顕彰館

論を初めとする同時代の西洋の科学・思想に関する本を読み込んだ。フロリダからキューバにかけて植物採集旅行を敢行し、熱帯の生態を直に体感した。ロンドンでは大英博物館にこもって稀観書の筆写を続けることもに、科学雑誌の『ネイチャー』などに多くの論文を発表した。そうした熊楠の学問的研鑽の意味は、英語圏の人たちには理屈抜きで理解してもらえない。なにせ、若い頃の熊楠は、読んでいる本もほとんどが洋書であり、発表した論文もすべて英語である。外国人の友人も多く、日本よりも英米での生活の方が

## 欧米で語られる熊楠

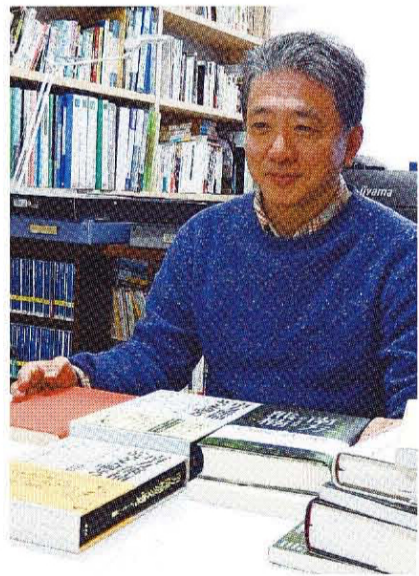
自分にとって自然だと切り切っている。だから熊楠の生活感覚や学問姿勢は、日本よりむしろ英米の方が身近に感じられるのである。

その一方で、いまだに型破りな人物としての面が注目される日本での熊楠のとらえられ方よりも、むしろ本質的なところに関心が向かっていることも感じることができた。たとえば、熊楠が英語の他にフランス語、ドイツ語、イタリア語、スペイン語、ラテン語を読みこなしたことは、日本では「天才」とか「驚異」という表現で喧伝されることが多い。しかし、熊楠の

ように五、六か国程度のヨーロッパ言語を操ることができる知識人は、日本では稀少かもしれないが、世界的には今も昔もそう珍しくはない。

それでも、近世の教養を引き継いだ熊楠の世代のように、膨大な和漢籍の知識を兼ね備えた人物、となるとこれは話が全く別である。東アジアと西洋の二

## 龍谷大教授 松居 竜五



まつい・りゅうご 南方熊楠顕彰会理事。昭和39年、京都府生まれ。東京大学文学部卒業。東大大学院総合文化研究科博士課程中退。学術博士。英ケンブリッジ大学客員研究員などを経て平成24年から現職。著書に『南方熊楠 一切の夢』『南方熊楠 複眼の学問構想』など。

つの世界で数千年にわたり蓄積された情報の海を自由に往還しながら渉猟できる視野の広い知識人は、後にも先にもこの世代以外にはほとんど見ることができない。南方熊楠の同級生に夏目漱石や正岡子規などの近代日本

の知性が輩出したのは、偶然ではないのである。熊楠が使った言語がいくつであったというような単なる数字、それも根拠のない伝説ではない細事が注目されてしまう日本とは異なり、むしろ今日の英語圏の方が、西洋一辺倒の学問を革新しようとしたという、彼の活動のより根幹的な部分が理解されやすい。後年の自然保護活動にしても、英国のナン



ロンドンで開催した熊楠に関する講演は、研究者らの注目を集めた—平成19年

ナルトラストなど同時代の世界の流れとの比較へと簡単に話が展開する。

私が感じた海外での関心は、欧米や中国で熊楠に注目する研究者が増えつつあることから実感できるだろう。熊楠の生涯における知的格闘の軌跡は、日本の学問世界という狭い領域を越えて、人類の共有財産となる資格を十分に備えている。

かつて、柳田国男は南方熊楠を指して「縛られた巨人」と呼んだ。だが、熊楠の研究を続けられ続けるほど、彼の思索が国家や民族や時代の枠を超越して自由に飛躍したことを感じざるを得ない。

本当に縛られていたのは、実は近代から現在にかけての、他の多くの日本の知識人たちの方ではないのか。学問の世界でも進む急速なグローバル化の中で、早晩、そのような認識の転換が進行するはずだと、私は考えているのである。